

ジュラシック・トーク

ラヴェル版「展覧会の絵」とピアノ版との比較

来年春の定期演奏会の曲目が、「展覧会の絵」に決まりました。ムソルグスキーの「展覧会の絵」は、もちろんオリジナルはピアノ独奏のための作品です。しかし、おそらくピアノ曲としてよりは、モーリス・ラヴェルが編曲を行ったこのオーケストラの曲として聴かれることの方がはるかに多いのではないのでしょうか。ただ、ラヴェルは、決してムソルグスキーが書いたピアノの楽譜に、そのままオーケストレーションを施したわけではありません。

ムソルグスキーが、友人の画家ガルトマン（「ハルトマン」という表記は誤り）の遺作の展覧会に触発されてピアノ独奏のための組曲を作ったのは1874年のことでした。しかし、楽譜が出版されたのは彼の死後、1886年だったのです。遺品の中からこの曲の楽譜を探し出して出版に尽力したのは、友人のリムスキー・コルサコフでした。ただ、彼はアカデミックな見地から、作曲家の自筆稿をよりノーマルな形に変えて出版してしまっただけです。自筆稿にほぼ忠実な、いわゆる「原典版」が出版されるには、パーヴェル・ラムによる校訂（1931年）を待たなければなりません。ラヴェルがクーセヴィツキーの委嘱によってボストン交響楽団のために編曲を行った1922年には、ですから、彼はリムスキー・コルサコフによる改訂版を元にする以外の選択肢はなかったのです。

リムスキー・コルサコフの改訂で最も目に付くのは、「ビドウォ Bydło（ポーランド語で、『村』は『エル (I)』にひげが付いた『エウ』です）の冒頭の「*pp*」という表記でしょう。自筆稿ではここは「*ff*」、最初からガンガン弾きまくれ、という指示になっています。ですから、「牛車が遠くから近づいてくる」というオーケストラ版で植えつけられているイメージは、作曲家のあずかり知らぬものだったのですね。

Bydło

Sempre moderato, pesante



[sim.]

←ピアノ（原典）版

ラヴェル版⇒

4. BYDLO

Sempre moderato pesante



2 Fagotti
Contrafagotto
4 Corni in Fa (F)
Tuba


もう1点、よく分かるのは「サミュエル・ゴールドンベルク」の最後の音形、自筆稿は「ド・レ♭・シ♭・シ♭」ですが、リムスキー・コルサコフはこれを「ド・レ♭・ド・シ♭」と変えてしまいました。ただ、この部分は指揮者の裁量で自筆稿の形に直して演奏するのが、最近の潮流のようです。

a tempo



cresc. *sf* *ff*

Ob.
I, II



f *f* *ff*

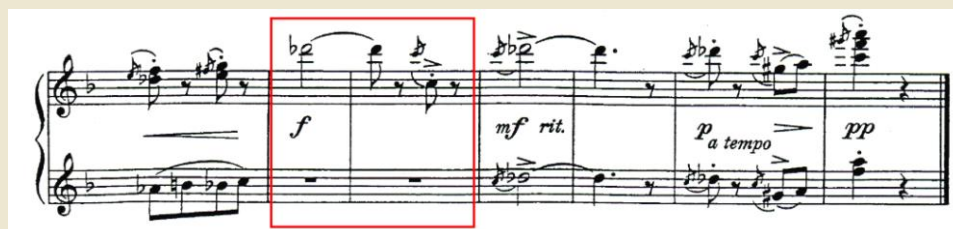
↑ラヴェル版

←ピアノ（原典）版

さらに、ラヴェルは、そのリムスキー・コルサコフ版を忠実にオーケストラ用に移し替えたわけでもありません。「サミュエル・ゴールデンベルク」と「リモージュ」の間にあった「プロムナード」をカットしただけではなく、「古い城」の18小節目のあとに1小節加えたり、「殻を付けた雛」のコーダの前の2小節をカットしたりしています。

「展覧会の絵」のオーケストラ版を作ったのは、べつにラヴェルだけではありません。スロヴェニア人の指揮者、レオ・フンテクという人は、ラヴェル版のほんの少し前、1922年の7月に独自の編曲版を出版しています。こちらには、ラヴェルが行ったようなカットはありません。ただし、「殻を付けた雛」の最後は、やはりラヴェルと同じ扱いです。

ピアノ版（原典版、
R.コルサコフ版とも）⇒



ラヴェル版⇒



実は、この部分は、どうもピアノ版の方が戻る場所を間違えているような気がしてなりません。別に、ラヴェル版に慣れているから、というわけではなく、どう考えても2小節余計な気がするのですよね（逆にピアニストの場合は、こちらの方がノーマルに感じられて、ラヴェル版のような「正しい」演奏には違和感があるのだそうです）。

ラヴェルやフンテク以外にも、オーケストラ版を作った人は数知れません。その中で、1939年に作られた、アメリカの指揮者レオポルド・ストコフスキーの編曲は、とてもユニークです。「Bydło」では最初からオーケストラは *ff* で演奏していますから、すでに出版されていた原典版を元にしていないのかと思うと、「サミュエル・ゴールデンベルク」の最後はリムスキー・コルサコフ版ですから、わけがわかりません。しかし、なんといっても特徴的なのは、「殻を付けた雛」の最後でピアノ版と同じ2小節余計な形をとっていることです。ちなみに、このストコフスキー版では、「チュイルリー」と「リモージュの市場」がカットされているほか、「バーバ・ヤーガ」や「キエフ」でかなり大胆な構成の変更が行われています。

ところで、お馴染みの指揮者、末廣誠さんが、2009年7月6日に開催された「仙台市市制施行120周年記念演奏会」で、仙台フィルを指揮していたのですが、その時に、末廣さんはこの「ラヴェル版展覧会の絵」を、「原典版通り」に演奏する、という試みを行っていました。つまり、オーケストレーションはそのまま、ラヴェルがリムスキー・コルサコフ版、あるいはピアノ版から変更を行った部分を、全て原典版通りに直して演奏していたのです。あいにく、そんなことは演奏される直前の末廣さんのプレトークで分かったことで、何の準備もしていませんでしたから、気が付いたのは「殻を付けた雛」の最後の部分だけでした。

来春の田中さんは、ラヴェル版をそのまま演奏されるのでしょうか。あるいは・・・